

創立125年物故者追悼式



大学創立記念日の9月16日、専修大学創立125年物故者追悼式が、神田キャンパスで130人が参加して行われた。

全員で黙禱をささげた後、出牛正芳理事長と日高義博学長＝写真＝が追悼の言葉を述べ、参列者全員で献花を行った。

【ニュース専修2004年10月号11面】

父娘でつかんだ栄光 一次世代へつなぐー 専大校友を訪ねて

アテネ五輪女子レスリング金メダリスト紗保里選手を育てた父

吉田 栄勝さん(よしだ・えいかつ : 昭50経済)



感動のアテネ五輪から1カ月半。金メダリストを生み出した「最強タックル」の原点に会いに、三重県一志(いっし)郡を訪れた。

青森県出身。八戸電波工業高(現・八戸工業大学第一高)で、レスリングに出会った。昭和48年の全日本学生王座・東日本リーグ戦優勝といった専大レスリング部史上最強の時代に中心選手として活躍、個人では同年の全日本選手権フリー57kg級のチャンピオンとなり、世界選手権にも出場。「目標となる強い先輩がたくさんいました。練習量に結果はついてくる、と信じて先輩にぶつかっていきました」

漁業に携わる父から受け継いだ強靱な足腰が持ち味。自分からはタックルを仕掛けず、ひたすら守って勝利をつかんできたが、モントリオール五輪出場をかけた試合は1ポイント差で逆転負けを喫した。「守りでは勝てない。タックルしかない」。レスリング観が変わった瞬間だった。

三重県の職員となり国体等で活躍した後、競技から離れたが、数年経つとマットが恋しくなった。そんな時、先輩が青森で「ちびっこレスリング」を指導していると聞き、自分もやってみようと自宅に道場を開いた。紗保里選手が3歳の時だ。以来、父娘二人三脚で栄光を目指す日々が始まる。「毎日タックルの練習でした。『ケガも練習のうち』と休ませなかった。それでも一度もやめたいと言ったことはありません」

現在は県立高校の事務長を務めながら、5歳から高校生までの「メダリスト候補生」を教える。

「教え方の基本は相手の目線に立ち、ごまかさずに説明すること。どんなに小さな子どもでも、理解します。一つの技が、個人の持つ身体能力によって、さまざまな形に変化するのを見ていると、ますますレスリングの奥深さ、魅力を感じます」

北京での紗保里選手の連覇も楽しみだが、その先の五輪でも「吉田道場」の教え子の活躍が期待できそうだ。

【ニュース専修2004年10月号11面】

世界大会で銅メダル

ライフセーバー 本多辰也さん(平12商)

日本を代表するライフセーバーの一人として活躍中の本多辰也さん(平12商、東京消防庁)は、9月に開催されたライフセービング世界選手権イタリア大会に出場。団体のビーチリレーで銅メダルに輝いた。個人種目のビーチフラッグスでは、メダル当確のところ、進路妨害の審議にかけられた。「『思わぬ』ことで必死に抗議しました。観客も味方についてくれましたが、結局失格の判定。やりきれない気持ちでいっぱいでしたが、神様が『もう少し頑張れ』と試練を与えてくれたと思うことで、気持ちを切り替えました」。試合終了後は各国の人たちが励ましにきてくれ、温かいことばをかけてくれた。「2年後の世界選手権まで、また練習に励み、この『借り』を絶対に返します」と強い決意だ。帰国後に出場した第30回全日本ライフセービング選手権では、得意のビーチスプリントで優勝を果たした。

【ニュース専修2004年10月号11面】